書評

河内将芳著

『戦国仏教と京都』
——法華宗・日蓮宗を中心に——

長崎健吾

河内将芳氏（以下、著者）は戦国期京都における都市民の人的結合について、主に宗教や祭礼に着目して精力的な考察を続けてきた研究者として知られている。本書は著者の第四論文集であり、戦国期から織豊期にかけての京都の仏教、特に法華宗（日蓮宗）にかんする既発表論文十六本と新稿三本を収める。一部一九九〇年代末のものもあるが、大半は二〇一〇年代後半の論考である。近年における著者の旺盛な研究活動の成果を概観できる一冊と言えよう。以下では各章の内容を紹介しつつ、評者の見解を述べていきたい。

まず「序」において著者は、「戦国仏教」という本書全体のキーワードをめぐる議論を整理する。周知の通り「戦国仏教」の語は一九七五年に藤井学が提起したものであるが、湯浅治久が『戦国仏教—中世社会と日蓮宗』（中央公論新社、二〇〇九年）で取り上げたことをきっかけとして、近年改めて注目を集めている。著者もまた湯浅の議論を意識しつつ、みずからの立場として①山門延暦寺や世俗権力といった他者との関係に着目して法華宗教団の軌跡を考察すること、②「社会的地位の上昇という動き」（一二頁）を戦国仏教としての法華宗の特徴として位置付け、それが近世以降の宗派分立状況につながっていく過程に着目すること、という二点を提示している。著者の旧著『日蓮宗と戦国京都』（淡交社、二〇一三年）で明確にされていた立場であるが、それを引き継ぎつつ、室町・戦国期における「宗派」「宗」の枠組みをめぐる近年の議論（川本慎自・大田壮一郎）との接続を試みている点が注目される。

最初に全体に関わる疑問を述べておけば、本書の議論を「戦国仏教」という語のもとで展開する必然性について、評者は根本的な疑問を覚えた。著者自身も触れているように（一三頁）、戦国期の仏教を論じることと、固有の研究史的文脈を持つ戦国仏教論を展開することは、イコールではない。藤井学が真宗や法華宗を戦国仏教と呼ぶことを提唱したのは、親鸞や日蓮の教説が民衆社会に広く受容されたのは戦国期であることを重視したためである。湯浅治久は地域社会と寺院の関係という視点を導入することで、民衆による受容という藤井の視点を展開したと言える。しかるに世俗権力との関係や宗派としての社会的ステータスを重視する著者の視角は、藤井や湯浅の戦国仏教論とほとんど対極的な位置にある。著者の視角を活かすならむしろ例えば、周縁部の中心化という視点から戦国期宗教勢力としての本願寺教団を考察した、安藤弥の議論との接続を図るべきではなかったか（安藤『戦国期宗教勢力史論』法藏館、二〇一九年）。今後本書を研究史のなかに位置付ける上では、右のような「ねじれ」に対する留意が必要になるだろう。

Ⅰ部「師僧と檀徒」は、法華宗とその信徒の関係を論じた文章で構成される。第一章「戦国期・近世初頭における本阿弥一類の法華信仰」は、良く知られた本阿弥一族の法華宗信仰を改めて取り上げる。これまで活用されてこなかった過去帳や系図類に目配りするとともに、近世初頭の京都における都市社会の変貌という観点を導入していることが特筆される。著者は「京都に居あき申候間、辺土に住居仕度」（『本阿弥行状記』）という本阿弥光悦の言葉に着目し、町の規制が強まっていくなかで多くの「上層町衆」が同様の志向を抱いたのではないかと推測する。右の言葉が「異風者」という光悦の強い個性によるものとされている点には注意が必要であるが、中近世移行期の町と「上層町衆」の関係を考える上で傾聴すべき指摘であろう。ただ、都市史的な観点からこの問題を考察するなら、本阿弥一族が集住する上京小川地域に関する先行研究（高橋康夫・五島邦治等）は参照すべきではなかったか。関連して、織田信長が上京焼き討ち後に建設した新在家を鷹峯光悦村の先例として重視するにもかかわらず、新在家の旧地である白雲（現・元新在家町）には言及していないのはなぜだろうか。小川地域に隣接する白雲の存在に触れていれば、光悦が新在家の記憶に基づいて光悦村を構想したという著者の論旨はより明確になったと考える。

補論「近衛家「奥御所」の臨終」は近衛政家の娘「奥御所」（諡号善種院、法名妙尊）の法華宗信仰を論じる。神田千里「中世後期の公家社会にみる家の信心」（『東洋大学文学部紀要』五二、史学科篇二四、一九九八年）は近衛家と法華宗の関係を詳しく論じており、参考文献に挙げるべきである。著者の論旨には神田の議論と重複する点が多い。なお最近評者自身も関連する論考を発表している（拙稿「近衛家に見る戦国期京都の法華宗信仰」『興風』三二、二〇一九年）。

第二章「戦国末期畿内における一法華宗僧の動向」は、仏心院（龍雲院）日珙が永禄から天正年間にかけて記した『己行記』の分析である。日珙と三好実休（長慶の実弟）一族との信仰による結びつきの考察が中心となっている。戦乱や飢饉など試練に満ちた戦国期において、危険を顧みず戦地に赴いた日珙が人びとの帰依を集めたと結論付ける。著者の論旨からは外れるが、武家とのつながりを背景に都市間を移動しながら布教を行なった日珙のような存在は興味深い。禅僧や宣教師との比較の可能性を感じさせる主題である。

第三章「「法華宗の宗徒」松永久秀」は、松永久秀と法華宗教団との関係を論じる。著者は、自身法華宗の有力信徒だった久秀が、門流の枠を超えて教団の動向に口入し得る存在だったことに着目する。その上で、永禄年間に京都の法華宗諸寺院が勝劣・一致の教義的対立を超えて連合（永禄の規約）する過程における、久秀の働きを検討している。著者には織豊政権についても論考や一般書などの業績があるが、本章および前章はその前段階に遡って、武家と法華宗の関係を取り上げたものと言えよう。久秀の老母が堺に居住する富裕な女性であり、法華宗諸寺院に規約締結の

会場を提供していた事実など、取り上げられている事例は非常に興味深い。しかし著者も認める通り、全体としては都守基一・天野忠幸両氏の研究と重複する内容が多く、著者独自の主張が見え難いように感じられた。

Ⅱ部は「寺地と京都」は、洛中における法華宗寺院の寺地をめぐる論考を収める。第一章「天文法華の乱後、法華宗京都還住に関する考察」は、天文五年に京都を追われた法華宗が復興を遂げる過程において、六角定頼が果たした役割を考察する。当該期の畿内政治史や六角氏研究が近年急速に進展していることを踏まえれば、現時点において取り組む意義の大きい主題と言えよう。山門が毎年百貫文の日吉祭礼要脚（著者は末寺銭と理解する）という実利と引き換えに法華宗の復興を認めたこと、天文十一年とされる「帰洛勅許」以前から細川晴元は法華宗寺院の帰洛を容認していたと見られることなど、いくつかの基礎的な論旨については、著者の旧稿「山門延暦寺からみた天文法華の乱」（『中世京都の都市と宗教』思文閣出版、二〇〇六年所収）の内容が踏襲されている。しかし、乱後における六角氏の立場の分析、山門と法華宗との交渉に関する本禅寺所蔵文書の紹介など、新たな指摘がなされている部分はいずれも興味深い。敢えて無いものねだりをすれば、六角氏が京都の法華宗を攻めるという永禄四年の風聞の背景に三好政権の存在を想定した最後の指摘は、本書全体の構成から言って、もっと展開する余地があったのではないか。付言すれば、天文期の幕政における六角定頼の諮問役としての活動を論じている以上、基礎的な研究として奥村徹也「天文期の室町幕府と六角定頼」（米原正義先生古希記念論文集刊行会編『戦国織豊期の政治と文化』続群書類従完成会、一九九三年所収）には言及すべきであった。

第二章「中世本能寺の寺地と立地について」、および第三章「中世妙顕寺の寺地と立地について」はいずれも、洛中に所在した有力法華宗寺院の寺地の変遷を検討したものである。特に本能寺と妙顕寺が選ばれたのは、関係する寺院史料の豊富さによるものであろう。法華宗寺院の寺地について著者は影山堯雄の論文に依拠しているが、影山による寺地の比定は伊藤毅「中世都市と寺院」（『都市の空間史』吉川弘文館、二〇〇三年所収）によって、三十年以上前にアップ・デートされている。伊藤論文は広く参照されている基本文献であり、言及していないのは著者の手落ちと言わざるを得ない。また第三章で取り上げられている本能寺敷地の非人風呂については、太田晴道「六角大宮の非人風呂について―本能寺非人風呂の再検討」（『桂林学叢』一九、二〇〇五年）の考察が詳しい。個別的な主題であるだけに、逸してはならない論考だったはずである。とはいえ、特定の法華宗寺院の寺地について関連史料を網羅して総体的に考察した研究は初めてであり、本書が今後参照すべき基礎的な成果になることは間違い無いであろう。この点を承認した上でなお不満として残るのは、寺地を論じることが今後のどのような議論につながり得るのか、著者が全く示そうとしていないことである。例えば、本能寺による敷地所有は買得に基づくものであったがゆえに顕密寺社のそれに比して不安定であったとする指摘（一一六頁）は、脇田晴子『日本中世都市論』（東京大学出版会、一九八一年）が提起した「地主的土地所有」と「領主的土地所有」の相違という、周知の議論と直接に関わっている。著者は脇田の議論にはやはり言及するべきだったろう。また、他にも小林保夫「地方頭人考」（『史林』五八―五、一九七五年）が室町幕府による京都の土地支配という観点から、本能寺敷地に関する相論を取り上げている。要するに著者が取り上げた題材は法華宗にとどまらず、都市史研究の重要な論点となり得るものなのである。寺地という題材を活かすことを考えれば、著者が先行する議論との接続に淡白であったことが勿体なく感じられる。

本部にはふたつの短い補論が配せられている。まず「中世本能寺の弘通所敷地について」は、中世において下京に所在していた本能寺が上京北小路室町に土地を買得し、「弘通所」と呼ばれる一種の布教施設を構えていたことを指摘する。第二章・第三章と同じく買得による土地保有の不安定性という議論が軸になっている。次いで「荒木村重女房衆と妙顕寺の「ひろ籠」」は、織田信長によって妙顕寺に設置された籠屋に注目する。この籠屋は天正六年に信長に背いた荒木村重の女房衆を収容するためのものであり、著者は信長の法華宗に対する信頼の反映として位置付けている。「ひろ籠」の設置や法華宗寺院の宿舎としての利用を踏まえるなら、信長と法華宗の敵対関係を強調してきた従来の見方には修正が必要になるというのが、著者の結論である。いわば「安土宗論史観」の相対化を目指した議論と言えよう。しかし著者のように主張する場合、安土宗論そのものの位置付けについては、別途考察が必要になるのではないだろうか。

Ⅲ部「勧進と経済」には、京都の法華宗諸本山が信徒に対して実施した天正四年洛中勧進（以下、「洛中勧進」）に関する論考三本が収められている。著者が一九九〇年代前半から精力的に取り組んできた主題であり、著者の過去の論集に収められた諸論考と合わせて読まれるべきものである。

第一章「「天正四年の洛中勧進」再考―救済、勧進、経済」は、洛中勧進の勧進として特色を、室町・戦国期に実施された他の勧進との比較という手法によって考察する。比較の材料として取り上げられるのは、寛正の飢饉のさい京都の飢人救済のため願阿弥によって実施された勧進や、元亀年間に京都阿弥陀寺の清玉が実施した東大寺大仏殿再興勧進の事例である。著者はこれらの勧進がいずれも「人びとを一人ひとり個人として否応なく捉えることで莫大な財を集積できるような構造」（一九四頁）を備えていたとし、こうした構造を象徴する言葉として「人別一文」という文言に注目する。そして洛中勧進は「師檀関係を基本にしつつ、教団や寺院が檀徒一人ひとりを個人として捉えることで莫大な財が集積されるようになっていた」（二〇九頁）点において、戦国期の他の勧進と共通の原理に立っていたとする。こうした意味において、洛中勧進を実施した法華宗のありかたはいわば、「戦国期の勧進をその内部にとり込んだものであった」（同前）というのが著者の結論である。洛中勧進は特異な要素の多い勧進であり、他の勧進との比較は確かに必要な作業であろう。しかし本章では、著者が考える戦国期の勧進の特徴と、中世における勧進の一般的特徴との関係が、十分考慮されていないように思われる。例えば著者は、戦国期におけるいわゆる新仏教の台頭は「人びとが一人ひと

り個人として帰依できる信仰」（二一〇頁）の登場を意味するとし、願阿弥・清玉や法華宗などによる戦国期の勧進はこうした信仰に立脚することで、多くの個人から出資を募ることができたと説いている。しかし個人単位の出資を募ることは中世前期から見られる勧進の一般的特徴であり、戦国期における新仏教の台頭と結び付けることには疑問が残る。なおこの点について評者自身は、洛中勧進において出資の基礎的な単位は当主によって代表される「家」だったと考えている（拙稿「戦国期京都における都市民の社会的結合と「家」」『史学雑誌』一二八―九、二〇一九年）。個人単位での出資を強調する著者の論旨を堅持するためには、勧進帳全体において信徒数の集計が「家」単位で行なわれている理由について、別途説明が必要と考える。また細かい点を言えば、著者は『諸寺勧進帳』には五〇文以下の出資が見られないと断定しているが（二〇一頁）、実際には二〇文・三〇文の出資が二〇件ほど含まれている。洛中勧進において「人別五〇文」の原則が存在したという著者の推測は、妥当ではない。

第二章「勧進と法華宗―新在家を中心に」は新在家（既述）の構造と、同地に居住する法華宗信徒について考察する。まず前半では近世初期の儒者・医師として知られる江村専斎の父、江村既在が勧進史料に見えることを指摘し、関連史料を紹介する。概ね古川元也の研究を踏襲する内容である。続いて、先行研究が寛永十四年『洛中絵図』をもとに新在家の構造を復元していたことを批判し、天正十九年の京中屋敷替以前における同地の町の位置を比定する。最後に古川の議論を批判する形で、法華宗が他宗の勧進に応じないことを認めた村井貞勝折紙が実効性を有していたと結論付けている。

史料の読みについて一点付言しておきたい。伊勢宇治橋修造勧進を行なっていた妙蓮上人から新在家中に充てた書状に見える「くわんしんの事、法花宗のよし、御ことハりき丶わけまいらせ候」云々というくだりを著者は、「「法花宗」は「くわんしん」を「御ことハリ」し」（二三〇頁）た、と読んでいる。「法華宗が勧進（への出資）を断った」というのが著者の「解釈」だと推察するが、誤りである。この部分は「勧進のことについて、（新在家中は）法華宗であるということを説明し、聞き入れられた」と解釈すべきである。評者としては誤読そのものというより、ここに見られる史料解釈に対する著者の姿勢に問題を感じる。この点は後述する。

第三章「「洛中勧進記録」について―中世京都における「都市文書」との関連において」は、洛中勧進の過程で作成された文書の特性について、同時期に町人が作成した惣町文書との比較を通じて考察する。表題の「都市文書」という語は必ずしも一般化していないが、中世都市研究に活用し得る多様な文書を体系的に整理するため、佐々木銀彌が提起した議論である。勧進史料は都市民（商工業者等）に関する膨大な情報を含んでいるが、佐々木の整理のなかには位置付けることができない。この点を踏まえて著者は、文書の作成主体や様式の共通性に着目することで勧進史料を都市文書論のなかに組み込むことを試みている。意欲的な議論であるが、著者が勧進史料のうち「勧進記録」のみを取り上げている点には注意が必要である。勧進記録は勧進帳をまとめる以前の段階で町毎に作成された様式にばらつきのある文書であり、そのなかには確かに檀徒が作成した文書も確認される。しかしそれは全体から見れば少数であり、そのすべてが檀徒の手になるものとする著者の想定には、なお留保の余地がある。そもそも勧進史料が全体として法華宗教団によって保存されてきた文書群であり、勧進帳以下その主要部分が教団側で作成された文書であることは明白である。それゆえ都市民（檀徒）自身の手で作成されたことを重視する著者の議論においては、勧進史料の大半（教団側で作成されたことが明らかなもの）は依然として都市文書論の対象外になっている。本章の考察は貴重な試みであるが、今後に多くの課題を残していると言うべきであろう。

Ⅳ部「東山大仏と京都」は、豊臣秀吉が実施した東山大仏千僧会、およびその会場となった東山大仏（方広寺）の造営を主題とする論考を収める。著者の旧稿「京都東山大仏千僧会について―中近世移行期における権力と宗教」（『中世京都の民衆と社会』思文閣出版、二〇〇〇年所収）をひとつのきっかけとして研究が活発化し、中近世移行期における権力と宗教の関係を考える上で重視されるに至った主題である。著者自身も既に多くの論考を発表しているが、本書には近年の論争的な文章や、新たな研究動向との接続を図った論考が収録されている。なお本部については法華宗との関係は希薄である。

第一章「東山大仏の歴史的意義」は、安藤弥・三鬼清一郎による著者に対する批判への応答である。全体の議論は、著者の『秀吉の大仏造立』（法藏館、二〇〇八年）に対する安藤の書評（『新しい歴史学のために』二七七、二〇一〇年）に応える形で進められる。まず著者は旧著における先行研究把握の不備を認め、東山大仏に関する研究史を改めて整理する。次いで秀吉による京都の都市空間構想と東山大仏の関係を再検討し、東山大仏の立地と本願寺の京都移転には一貫した宗教的意味があったとする安藤の主張を退ける。以上を踏まえた上で展開される著者自身の論旨はやや分かりにくいが、評者なりに整理すれば、①中近世移行期を宗教的権威が退潮する時代と捉えた上で、そうした状況においてなお秀吉が大仏殿を造営せざるを得なかったことの意味を問う必要があるということ、②こうした視点を欠落させ、抽象的な宗教的権威の存在を前提としている点が、安藤や三鬼の議論の根本的な問題であるということ、という二点にまとめられるかと思う。個別に気になった点として、東山大仏は宗教施設では無いとする著者の主張（二六八頁）は、安藤・三鬼への批判が先行した勇み足ではないか。造立意図や寺僧集団の存在を示す同時代史料の不在という消極的根拠だけでは、大仏殿や経堂を一種の宗教施設とする、極めて常識的な理解を退けるには不足であろう。宗教施設でないとすれば東山大仏をどのように規定すべきなのか、著者自身の見解が提示されていないことも、議論の説得力を損ねている。

第二章「東山大仏と豊臣政権期の京都―秀吉在世時を中心に」は、東山大仏造営の経緯を秀吉の京都改造政策とのかかわりから考察する。まず著者は、大仏の立地として東山の「汁谷」（渋谷）付近が選ばれた理由を考察する。著者は秀吉が同時期に聚楽第に加えて大坂城と大津城を造営していたことに着目し、大仏の立地は

宗教的理由ではなく、京都・大坂・大津を結ぶ交通の要衝であるという「実利的な理由」にもとづいて決定されたとする。著者自身は明言していないが、大仏の立地において宗教的理由を退けたことは、前章で触れた安藤や三鬼からの批判に対する回答と言える。続けて著者は、文禄四年の秀次切腹・聚楽城下町構想の破綻によって方広寺構想も変質していった（具体的には信濃善光寺如来を本尊に据えるに至った）という西山克の指摘を継承し、豊臣政権をめぐる状況の変化と大仏造営の関係を考察している。この部分については率直に言って、違和感のある表現、論旨の把握が困難な表現が多かった。例えば大仏が「京都から伏見へとその関係の重心を移していった」（二九二頁）という文章が具体的にどのような事態を指しているのか、少なくとも評者には良く分からない。また著者は秀吉が大仏に対して「とりまく環境に融通無碍に対応できる柔軟性」（同前）を求めていたとするが、政局の変遷によって造営計画が二転三転したことが何故、「柔軟性」を要求したことになるのだろうか。秀吉の死によって大仏造営が進捗したことは一面の事実としても、それが何故、豊臣政権にとって大仏造営が「あるべきすがたの大仏」（二九三頁）の追求に変質したことになるのだろうか。著者のなかでは何らかの筋道が付いているだろうが、読者に過度の「読解力」を要求する文章は、いかがなものかと思われる。

第三章「東山大仏千僧会の開始と「宗」「寺」」は、秀吉が主催した大仏千僧会における「宗」と「寺」との関係を論じる。著者によれば、豊臣政権は「「寺」の集積したものが「宗」である」（三一五頁）という認識にもとづいて京都を主な基盤とする諸宗に対して法会への出仕を要請し、これが繰り返されることによって、相互に対等で自立した存在としての「宗」という見方が定着していったとする。僧侶の側は対立する門派同士（山門と寺門等）がひとつの「宗」として捉えられることに反発しつつ、法会における席次等を他宗と競い合うことで豊臣政権による「宗」の枠組みを受け入れていったとするなど、興味深い議論が多い。また、千僧会に招請された新儀八宗の内部に依然として階層性が存在していたことを指摘し、当該期における八宗が「横並びの併存」を指すものだったという大田壮一郎の議論を批判している。他にも興味深い議論が展開されているが、肝心の豊臣政権における「宗」の意義については、もう少し丁寧な議論が必要と感じる。言うまでもなく個々の寺院が特定の「宗」に属すという理解は千僧会以前から広く存在しており、「寺」の集積が「宗」であるという著者の表現もまた、こうした既存の理解を前提としたものになっている。その意味で著者の議論では、千僧会における「宗」の画期性を過不足なく捉えることが難しいのではないか。とはいえ本章が中世後期仏教史研究における近年の重要トピックと著者の戦国仏教論との接続を図った意欲的なものであることは間違いない。今後の議論の帰趨が注目される。

付論「新多武峰と大織冠遷座について」は、天正十六年における多武峰大織冠（藤原鎌足）像の大和郡山への遷座について、豊臣政権との関係を中心に論じる。遷座は豊臣秀長の病気平癒を祈願して行なわれたとするのが著者の結論であるが、論証の過程に疑問が多い。例えば著者は当時多武峰と秀吉は対立関係に無かったという前提に立ち、『多聞院日記』天正十三年閏八月二五日条を秀吉による刀狩・僧兵鎮圧の記事としてきた先行研究を批判する。しかしこうした主張のためには、「（多武峰衆徒が武具を）悉以為進上持上」云々という当該記事の解釈が問題になる。「進上」を豊臣政権に武具を献上すること、「持上」を武具を持って上洛することと解釈するなら、著者の主張は成り立たなくなる。しかるに著者は史料の文言を引用するのみで、立ち入った解釈（「進上」の相手を補う等）を行なっていない。また著者は同年九月五日に多武峰衆徒が逃散したさい「老衆」が山に留まっていた事実から、当時の多武峰が「若衆」と「老衆」の対立という問題を抱えていたと想定する。しかし同じく『多聞院日記』の「（多武峰が）悉以逃散相果了、如形老衆・行人残」（傍点評者）云々という記述からすれば、老衆が残ったのは逃散における一種の作法と見るべきである。だとすれば、当該期の多武峰に寺内対立を想定することで成り立っている著者の議論全体が宙に浮いてしまうことになる。多武峰衆徒が逃散に至った背景はやはり、直前の刀狩に関連する豊臣政権との緊張関係だったと見るべきではないか。この件に限らず本書には、史料の文言を重ねて引用するだけで「解釈」とするような記述が散見される。例えば「弓以下の武具が「惣山ノ衆」によって「悉以為進上持上」げられたと読むのが自然であろう」（三二二頁）という文字列から著者による解釈の内容を一義的に読み取ることは、評者には困難であった。

Ⅳ部の補論は藤井学『法華文化の展開』（法藏館、二〇〇〇年）、『法華衆と町衆』（法藏館、二〇〇三年）に対する書評である。歴史学と一般社会との乖離を批判し、総合的な学としての文化史の重要性を訴えることが、両書に込められた藤井の意図であったと結論付けられている。

「終」ではⅠ～Ⅳの議論全体を振り返り、まとめと展望を提示する。まず著者は、戦国期京都の法華宗には文明期・元亀期・慶長期という三つの転換点が確認できるとし、各時期における転換の内実を概観していく。第一の転換期である文明期において法華宗は、山門集会事書や記録類に見られる「繁昌」「京中充満」といった言葉で表現されるような、「前代とは異なるすがた」（三五五頁）を現わすようになったとされる。著者の表現はやや漠然としているが、要するに京都における法華宗信徒の増大が社会的に顕著になった時期と言ってよいだろう。そして著者によればこうした状況は、本阿弥一類や近衛家の信仰が文明期を画期としていたこととも符合していると言う。第二の元亀期において法華宗は自宗内部で独自に勧進を実施するとともに、「志次第」「人別一文」といった言葉の下で宗派を問わず実施される既存の勧進を排除する志向を見せるようになる。また、こうした志向が可能になった背景として、織田信長による比叡山焼き討ちが元亀二年に実施され、当該期の法華宗が山門の影響力から自由になったことが挙げられている。その反面として著者は、法華宗が京都を支配する武家権力に直接対峙するようになったこともこの時期の特徴であるとしている。最後の慶長期において、法華宗は豊臣秀吉が主催した東山大仏千僧会に新儀八宗のひとつとして招請され、こ

れを通じて他宗と対等な存在として分立する自律的な宗派に変貌していった。この点において慶長期は戦国期京都の法華宗にとって転換期であると同時に逢着点であり、この段階ではもはや「戦国仏教」という用語自体が適合的でなくなると結論付けられている。

以上の結論のなかでとりわけ注目されるのは、戦国期法華宗の動向を見ていく上で、山門延暦寺との関係を一貫して視野に収めている点である。山門と京都の関係については室町期段階までは多くの優れた研究があるが、戦国期以降については依然として手薄な状況である。著者の議論は京都を基盤とする法華宗と山門の関係に着目することで、こうした研究の隙間を埋める手がかりを提供するものとなっている。宗教一揆論に限定されない、顕密諸宗を含めた戦国期仏教研究の新たな枠組みが模索されている現状において、本書の議論は極めて有益なものであろう。その他の点についてもおおむね、本書全体の内容をうまく取り入れた結論になっている。

しかしその一方、戦国期法華宗の転換期については、議論の運び方がやや恣意的なものと感じられる。まず、転換期を設定する基準が文明・元亀・慶長の三つで大きく異なっており、目に付いた事象によって表層的に時期区分を行なったという印象は否み難い。なかでも最大の問題は、天文期を転換期から除外していることである。言うまでもなく天文期には天文法華の乱が勃発しており、著者が転換期を設定する上で重視する法華宗と武家権力（足利義晴・細川晴元政権）や山門との関係についても、この時期に大きな変化が認められる。戦国期京都の法華宗にとって天文期を転換期と見るのはひとまず常識的な見解であり、敢えて除外するのは最大限の慎重さを要する選択となるはずである。しかるにこの点について著者は、まったく説明を加えていない。右のような意味において著者の時期区分は実態との乖離が大きいように思われ、少なくとも評者にとっては、そのままでは受け入れ難いものである。いま一点、これは無いものねだりを承知で付け加えれば、著者が戦国期（応仁の乱以後）という枠組みを自明の前提として「戦国仏教」を論じている点も気になるところである。もともと藤井学の戦国仏教論においては戦国期に法華宗や一向宗が台頭してくる前提として、それ以前からの布教活動や経典転写の蓄積という側面が重視されていた。戦国仏教論を今後に活かすためには、これを室町期以前との連続性を重視する議論として捉え直すことが必要ではないだろうか。

最後に本書全体を通じて気になった点を二点指摘し、さらに本書の成果を踏まえた今後の議論の方向について展望しておきたい。第一に気になった点として、既に具体例を挙げて批判した通り、著者自身の見解を明快に提示していない史料解釈が散見される。自身の「解釈」に対して読者にさらなる解釈を強いるようでは不親切であるし、解釈者としての責任回避という批判を避け難いのではないか。第二に、これも既に指摘したように、題材に関する重要な先行研究を参照していない章が少なからずある。こうした状態を是正しないまま書籍にまとめられたことは、極めて遺憾である。また、煩雑になるので一々触れなかったが、先行研究の内容整理として不正確と思われる箇所、先行研究の論旨と著者自身の見解との区別が曖昧な箇所も散見される。本書において先行研究に対する著者の姿勢は、いささかルーズと言わざるを得ない。

「戦国仏教」について現在は実証作業を蓄積すべき段階だというのが、本書全体を貫く著者のスタンスである（一三頁、三六六頁）。しかし本書の内容を検討するなかで、評者は逆の印象を持った。寺地の問題や勧進、都市文書論、大仏千僧会など、本書で取り扱われている素材には戦国仏教論に限定せず、仏教史一般や隣接領域の研究と接続した方が展開の余地が大きいように思われるものが多い。個別の実証作業が重要であることは言うまでもないが、現状で必要とされているのはむしろ、個々の題材をより広い文脈のなかに開いていくことではないだろうか。こうした意味において本書の成果は、戦国期法華宗の問題にとどまらず、様々な分野の研究者の手で批判的に活用されることによってこそ、今後の研究進展に大きく貢献し得るものであろう。

（法藏館　二〇一九・九刊　A5　三九四頁　七五〇〇円）